

生死を超える

——親鸞聖人の場合——

日野紹運

(名古屋大学)

一 生死出づべき道、あるいは出離生死について

凡夫は、生死を繰り返しつつ六道を輪廻する存在である。そして、それゆえ転生の輪から解放され、さとりを得て仏となることを希求した。その中では、人（凡夫）の生き死には六道を転生していくなかの人間としての生の始まりと終わりにすぎない。表題で「生死を超える」というとき、筆者は前者の六道において繰り返していく生死の意味で用いている。そして後者の生死は、死生観につながる生死無常の議論につながっていくと考え、本稿では議論の対象とはして⁽¹⁾いなかった。

親鸞の求道の道をたどろうとすると、その求道の目的を表す語として「生死出づべき道」また出離生死は重要表現として頻出する。なかでも『恵信尼消息』の次の一文は人口に膾炙したものとなっている。

法然上人にあひまゐらせて、……ただ後世のことは、よき人にもあしきにも、おなじやうに、生死出づべき道をば、ただ一すじに仰せられ候ひしを、うけたまはりさだめて候ひしかば、「上人のわたらせたまはんところには、

人はいかにも申せ、たとひ悪道にわたらせたまふべしと申すとも、世々生々も迷ひければこそありけめ……

（傍点筆者で以下同じ）『惠信尼消息』⁽²⁾ 一

法然上人と「生死出づべき道」の強い関連を示す一首を挙げておこう。

曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずは このたび空しすぎなまし

『高僧和讃』⁽³⁾ 101

これらより、法然上人のもとにはせ参じた理由が生死出づべき道を求めることとわかる。そして生と死を繰り返している輪廻という迷いの世界にわが身があり、そしていくら生を多々多々うるにしてもそれがむなししいものとわかつている。法然上人との邂逅がなければこの生も空しすぎていき、やはり転生の輪の中にとどまるのみである。

親鸞が生死を三世的世界観に立って「生と死を繰り返している事態」ととらえていることが窺える。また以下からもこのことは理解できる。

現にこれ生死の凡夫、罪障深重にして六道に輪廻せり。苦しみいふべからず。……『教行信証』⁽⁴⁾ 行巻
以上、生死出づべき、あるいは出離生死というのは、生死を出でて涅槃にいたるあるいは生死を超えて涅槃を得る、すなわち「生死を繰り返しながら六道を輪廻する人間が、解脱して涅槃に入る」の意と解することができる。

二 生死即涅槃について

……凡夫道は究竟して涅槃に至ることあたはず、つねに生死に往来す。これを凡夫道と名づく。出世間は、この道によりて三界を出づること得るがゆえに、出世間道と名づく。

同左⁽⁵⁾

そして、これに関連して以下のように述べる。

經（華嚴經）にいはく、「十方の無碍人、一道より生死を出でたまへり」と。一道は一無碍道なり。無碍は、いはく、生死すなわちこれ涅槃なりと知るなり。かくのごときらの入不二の法門は無碍の相なり。同左⁽⁶⁾

凡夫は三界の生死の世界、すなわち世間の存在である。三界を出て涅槃あるいはさとり（浄土、仏）の世界、すなわち出世間にいたった人は、無碍の人である。その両者が不二であることすなわち生死即涅槃の智こそが生死を超える道であることが明示されている。

親鸞はこの生死即涅槃をさらに詳細に説いて、「正信心仏偈」において証知生死即涅槃と言う。

感染の凡夫、信心発すれば、生死すなわち涅槃なりと証知せしむ

「本願信受のとき、煩惱具足の凡夫でもこの信心を得たなら、仏のさとりを開くことができる」

『教行信証』行巻⁽⁷⁾

ここで、涅槃は生死とは別にある世界ではないことが強調される。有限の生死を繰り返す世界が減するとき、無限のさとりの世界が現れるのであるが、生死の世界からさとりの世界に移っていくことではない。涅槃に入つて（仏のさとりを得て）初めて知られることである。もし生死のほかに涅槃があるとすれば涅槃もまた有限なものになつてしまふからである。生死してその煩惱の迷いの世界の中においてこそ涅槃のさとりがあると言ひ、煩惱を絶つことなくそこに涅槃があることを述べる。生死の世界にあるから煩惱を経つことはできないが、「生死の繰り返し」がなくなる世界という意味である。さらに、後に議論されることであるが、その契機が本願信受であること、本願信受の後も煩惱は残ることが言われている。親鸞の場合、生死の世界の滅の後に新たな涅槃の世界がという事態を言

っているわけではないのである。

往相の廻向とくことは……悲願の信行えしむれば

生死すなわち涅槃なり

『高僧和讃』三五⁽⁸⁾

さらに、この生死即涅槃について従来の浄土教あるいは親鸞の先達である七祖（龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信および法然）の解釈にはない親鸞独自の解釈である「往生即成仏」および「現生正定聚」によって基礎付けられているのである。すなわち、証知生死即涅槃のうち「証知せしむ」という語は「仏のさとりを開く」の意であるが、親鸞の場合、本願信受こそが、往生する身となる⁽⁹⁾さとりを開くべき身となる⁽⁹⁾仏となるべき身となる⁽⁹⁾生死即涅槃を知るべき身となることを意味する。そして実に、さとりを得るのは浄土往生のときすなわち臨終のときであって、存命中に仏のさとりを開くことはないことを言明する。

また、浄土往生してさとりを開いて仏となる、すなわち「往生即成仏」を説く。

臨終の一念の夕、大般涅槃を超証す

『教行信証』信巻⁽¹⁰⁾

とあるように、臨終のとき直ちに涅槃に入るので、現生で正定聚の身となることで必要十分なのである。浄土往生した後、修業の過程はない、現生にあっては肉体をもつ存在である故に仏になれないだけなのである。浄土という不退の土で、修業を続け、やがて仏となるという従来の浄土教における考え方は異なっているのである。

『仏説無量寿経』中の第十一願文に対する理解、解釈に如実にそれが見られる。

たとひ我仏を得たらんに、國中の人天、定聚に住し、かならず滅度に至らずは、正覚を取らじ。⁽¹¹⁾

「私が仏になったとき、私の浄土に生まれたものは正定聚の位に住し、やがて滅度（仏）のさとりを開くことが

なかったならば、私は仏にはならない。」

三界の生死の凡夫は、浄土往生して、(浄土という不退の土で修業して、) 正定聚の身となり、やがて、成仏するというのが経文の意味であり、七祖の理解もこれに従っているのである。これに対して、親鸞は、存命中に正定聚に入ること、死を迎え浄土往生すれば直ちに成仏する、すなわち往生即成仏としたのである。⁽¹³⁾

『高僧和讃』も次のように言う。

願土にいたればすみやかに

無上涅槃を証してぞ……

『高僧和讃』二〇⁽¹⁴⁾

仏陀は三六歳で有余涅槃に達し、八〇歳で無余涅槃(＝大般涅槃)に入った。インドの伝統では、それぞれ生前解脱、離身解脱ともいう。身体を有した状態で、人としての命のある間の涅槃、解脱の状態を有余、生前と言い、臨終のとき、無余、離身の解脱というが、解脱と涅槃の間に意義に違いはない。生前の場合は主客二元世界にあってあらゆる欲望、執着の種はあろうとも、不動心、無関心、独存と称されるように、解脱の人はそれらから離れている。しかしながら、親鸞の場合にはいささか事情が異なる。

先の引用にもあるように、⁽¹⁵⁾言葉の上では、臨終(＝浄土往生)をもって無余涅槃に等しい「大般涅槃」というが、生前に有余涅槃に近い事態である本願信受と入正定聚をみとめつつ、命ある限りの煩惱具足を前提とし、その結果煩惱に惑う正定聚の身の者の生き方、生活態度はともインドで言う解脱した人とは比べることはできない。

三 現生において転生の輪からの解放を求めること

人身受けがたし、今すでに受く。仏法聞きがたし、今すでに聞く。この身今生にむかって度せずんば、さらになぜの生にむかってかこの身を度せん。大衆もろともに至心に三宝に帰依したてまつるべし。……

と、三帰依文にあるように、三世にわたる生死の中にあつては、この身の生死が最大の問題である。それゆえ今生においてさとりを開く身とならなければ、他のいかなる生存において迷いのみを離れることができるのか？ この機会を逃したら今後どれだけの生き死にを繰り返していくことになるのかわからない。いまが輪廻の世界から涅槃の世界へ渡る千載一遇の機会なのである。

親鸞も同様であつた。生死のものを人間に限定し、今生きている人間、それは生まれて、やがて死んでいく存在であるが、それゆえに背負った苦悩から逃れる道を求めたのである。人は生死の中に生きながら、生死の問題すなわち「生死をいかにしたら超えることができるか？」を解決しなければならぬのである。そして、それは、将来ではなく、今生きているうちに、現生においてに解決しなければならぬのである。こうして、出離生死の問題「生死にとらわれた世界からいかにして離れることができるか？」は、いまの生死の中にあつて、生きているうちに、わが身を救うという問題となつた。それは、それによって生き、安心のうちに死んでいける道の追求であつた。

インドの場合に見た有余涅槃のように、あるいは自力聖道門で言うように、現生において、生身の体を持った人間として、さとりを開いて、仏になることは不可能なのである。「この世でさとりを開いて、仏になる」ことはないのである。あるいは浄土教で言うように、「浄土往生してやがてさとりを開く」ことも困難である。この世で、往生す

べきと定まる、あるいは仏となるべき身と定まる（正定聚）こそが、煩惱具足の凡夫の望みうることであった。本願信受の身となり、いま正定聚の位にあるから、未来の往生・成仏は間違いない、いま煩惱具足の凡夫だが、（往生浄土が定まっているから）煩惱が苦の因とはならないと考えたのである。

以下の引用では、現生での本願信受が仏になることに直結していることが明白に説かれている。

往相廻向の心行を獲れば即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するが故にかならず減度に至る

『教行信証』証卷⁽¹⁸⁾

眞実信心うるひとは

すなわち定聚のかずにいる

不退のくらゐにいりぬれば

かならず減度にいたらしむ

『浄土和讃』五九⁽¹⁹⁾

四 現生正定聚について

現生正定聚とは、本願信受して正定聚の身となること、生きている今ここで、往生すべき身と定まることである。

『一念多念文意』中の「正定聚のくらゐにつきさだまる」および「正定の聚に住す」の語句にそれぞれ次のような左訓がついている。

ワウジヨウスベキミトサダマルナリ

『一念多念文意』左訓⁽²⁰⁾

カナラズホトケニナルベキミトナレルナリ

同左⁽²¹⁾

また、これまで述べてきていることだが、本願信受の後にも煩惱は依然として残るが、その事態を「正信心仏偈」は、不断煩惱得涅槃と述べている。

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり⁽²²⁾

「信を起こして、阿弥陀仏の救いを喜ぶ人は、自ら煩惱を断ち切らないまま浄土でさとりをうることができ
る」(能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃)

早島博士は易しく説いている。

真の念仏者になるとは、じつは阿弥陀仏の智慧のはたらきによって、つまり念仏のはたらきによって、仏となる身と定まることです。しかも煩惱をもちつづけているけれども、阿弥陀如来の光明のお育てによって人生を渡る念仏者となっていくのである。しかし、私が真実の自己になるのはいのち終わって浄土に生まれたそのときなので、そこに行くまではまだお互いに人間の肉体をもって生活している。つまり煩惱の日暮らしを続けていても、ひとたび如来の本願を信じ、念仏に生きる身となれば如来に対する疑いが晴れていますから、後からどんなに煩惱が起こっても私の往生浄土のさわりにはならないという主旨がここではっきり述べられています⁽²³⁾。

また、村上博士はここに二種深信の意義を強調している。本願の信心は、機の深信と法の深信にひられる。自らの力が浄土往生に無力と知られて自らのほからいを捨てる(機の深信)および出離はただ仏の救いの力によると信知する(法の深信)である。捨機托法のことである。不断煩惱は機の深信であり、得涅槃は法の深信である。前者は後者を離さず、後者は前者を離さない、両者が一つとなった捨機托法をもって信心(＝本願信受)が成立する。

親鸞は煩惱具足の身だからこそ本願信受がありうるという論理を展開する。本願信受が仏となる唯一の道だが、そ

の本願信受には不可避的に煩惱が随伴するのである。肉体あるから煩惱を滅することができないというより、本願信受の前提条件として煩惱具足がある。

親鸞は晩年の著作でさえ、この煩惱は臨終の一念にいたるまで絶えることはないという。

凡夫といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらはれたり。

『一念多念文意』⁽²⁵⁾

『歎異抄』九⁽²⁶⁾ は本願信受の後の煩惱の強さ深さを切々と説く。

よろこぶべきころをおさへてよろこばざるは煩惱の所為なり。……また浄土へいそぎまありたきころのなくて、いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも煩惱の所為なり。久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだ生まれざる安養の浄土は恋しからずさふろふこと、煩惱の興盛に候ふにこそ。

「信心をいただいたと言っても煩惱のせいで喜ばしい気持ち起きない。……今のこの生への執着があるから浄土往生を急ぐ気持ちも起きない。それどころか病にでもなろうものなら心細くてこのまま死んでしまうのではないかと思ったりするのも煩惱のせいである。遠い昔から生き死にを続けてきた、苦悩に満ちたこの迷いの世界は捨てがたく、まだ生まれたことのない安養の世界に心惹かれないのはやはり煩惱のせいである。」

しかしながら、本願信受の念仏者にとっては、この煩惱が浄土往生のための障碍とはならないことを保証し、述べた言葉が「念仏者は無碍の一道なり」(『歎異抄』七)⁽²⁷⁾である。念仏者は、何者にもさまたげられない一筋の道を歩む

ものであるの意味である。ここで、無碍というのは、さわりがなくなるということではない、さわりがあってもさわりにならないということである。

無碍といふはさはることなしとなり。さはることなしと申すは、衆生の煩惱悪業にさへられざるなり。⁽²⁸⁾

無碍と申すは、煩惱悪業にさへられず、やぶられぬをいふなり。⁽²⁹⁾

信心の人でも、臨終の一念にいたるまで、煩惱に苦しみ、悩み多い人生を送る、そのなかでも、それらがさわりとはならず、念仏に励まされ、支えられて生きていけるのである。

生身の肉体を有する身であることも、それゆえに沸き起る煩惱をもてあましていることも、信心あることによつて、浄土往生の阻害因子にならない。欲望がないあるいは欲望を滅した状態を生前解脱という。欲望があつてもそれがはたらかないならば、生前解脱と同じ境位であると言えよう。そのところを煩惱があつても浄土往生に変わりなしと言うのである。

五 如来等同あるいは便同弥勒について

現生正定聚の身となつた念仏者は、如来等同あるいは便同弥勒と呼ばれる。

信心よるこぶそのひとを 如来とひとしときたまふ……

『浄土和讃』九四⁽³⁰⁾

如来は仏であるが、他方いまだ現生にあつて、浄土にいるわけでも、さとりを開いているわけでもないで、正確には同じではないが、ほとんど同じと言う意味合いで用いている。

また、

眞実信心うるゆへに すなわち定聚にいりぬれば

補処の弥勒におなじくして……

『正像末和讃』二八⁽³¹⁾

この人「信心の人」は現生正定聚の位に定まるなりとするべし。しかれば、弥勒仏とひとしきひとのたまへり。⁽³²⁾

まことの信心の人をば、諸仏とひとしを申すなり。また補処の弥勒と同じとも申すなり。⁽³³⁾

弥勒の位は等覺位で仏と等しい位だが、五十六億七千万年のちに成仏すると言われる菩薩なので、将来に必ず仏になるという意味で同じなのである。

六 前念命終後念即生について

『往生礼讃』に前念命終後念即生⁽³⁴⁾という語句がある。これは「命が終わって即のときに浄土に生まれる」の意と理解されてきた。これを親鸞は、次のように解釈した。

信受本願は前念命終なり、即得往生は後念即生なり

『愚禿鈔』卷上⁽³⁵⁾

「信心決定して、直ちに正定聚に入る」

前念とは、三願転入との関連で言えば、第十九及び二〇願念仏すなわち人の力によって為される自力念仏を指す。そして後念とは、第十八願念仏すなわち仏の力の他力念仏である。すなわち、本願信受の瞬間をみれば、それは自力念仏が終わり、如来廻向の信心をたまわったときであり、その信心が口から念仏として発せられたときである。まさに仏によって仕向けられたものである。このときが、まさに、入正定聚、往生する身と定まったときなのである。

ここで強調されるべきは、親鸞は本願信受を命終すなわち「死」ととらえていることである。自力念仏が終わるとき、すなわち自力念仏者として生が死ぬときなのである。

肉体を持つ人間が、生死に生きる身としては「死ぬ」体験をし、生死を超える身となる。生きている身でありながら、死にはもはやとらわれない身となる。そのような体験を本願信受としたのである。

死というのはその前後の連続性を否定するものである。この場合でいえば、自力がまったくなくなつたところにおいて、初めて成立するものが他力である。前者は人の行為であり、後者は仏から廻向されるものであるから、その両者に因果関係どころかいかなるつながりの可能性もない。断絶があるとしかいいえない。前の自力の無のところに、他力の摂取が行者の上におこるのである。このところを親鸞は「たまたま遭遇する」と表現している。

ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の淨信、億劫にも獲がたし、たまたま行信を獲は、遠く宿縁を慶べ。
『教行信証』序⁽³⁶⁾

三世にわたって流転し、現生においても生死の惑いの中にある凡夫は、本願信受という宗教体験によって惑いの俗のわが身の死を体験する。そして真の自己に目覚め、仏に身をあずけた他力念仏の道を歩み始める。そして死を経て、聖なる体験をした者としてよみがえる。俗に還ってくるとしても聖の体験を経たものは、前の俗なるものではない。俗にあって俗でない、いわば非俗のものである。この非俗のものは生死の世界に生きながら、生き死にとらわれることはないのである。

七 本願信受の念仏者の姿、あるいは生死を超えた念仏者の生き方

信を発して称名すれば 光摂護したまふ また現生無量の徳を獲る

『浄土文類聚鈔』⁽³⁷⁾

南無阿弥陀仏をとなふれば この世の利益きはもなし

『浄土和讃』九九⁽³⁸⁾

本願信受の者は無量の徳とか無限の利益と表現される。精神的あるいは物質的利益のいずれにしても、今もてるもので全てだ、十分だと思はずはなく、望むもの全てを所有するとしても、結局無限に求める気持ちが終わることがないことになる。欲望に終わりはなく、それによってかえって苦しむ事態も起こりうるのである。

真に無量の徳というのは、そういうものの有無をこえたところであって、あればあって喜び、なければないで喜べる心である。そうであるならば、臨終まで消えることのない煩惱もあえて忌み嫌うべきものでなくなり、あることによつてかえつて本願にあう機縁⁽³⁹⁾であったと喜べるのである。

最後に、生も死も、そのまま阿弥陀仏にまかせる心境、浄土往生が定まり、そのうえで身に起こる様々な事態も、そのまま安んじて受け入れる生き方、生活態度の述べた句を示すことにする。

ふつてよし はれてよし

なくてよし あつてよし

しんでよし いきてよし⁽⁴⁰⁾

現生正定聚の身にあつて、あるがままの事態を「よし」として喜々として受入れ、いかなるさわりがあつてもさわりにならない、そのような真の念仏者をうたった句が「しんでよし、いきてよし」の日暮しの人、生死を超えた人で

ある。

八 結 語

親鸞聖人の出離生死の意味は、輪廻転生の人間の解放、すなわち人間である今生での救済（＝解脱）のことと考へ論述したが、以下にまとめ、結語とする。

①三世にわたって生死を繰り返す（＝転生する）者が、生死を超えるとは、人である現生において解脱する、涅槃に入る、仏となることである。

②親鸞は生死即涅槃で、生死の中に涅槃を求めた。

③親鸞は往生即成仏を主張する。

④親鸞の（現生）正定聚は、臨終後の往生即成仏を保証した。

⑤親鸞の本願信受は入正定聚である。

⑥さらに、本願信受＝現生正定聚の身＝「しんでよし、いきてよし」の生活態度＝生前解脱の人（真の念仏者、念仏の行者）であり、また、如来等同、便同弥勒と呼ばれる。

これが生死を超えた人の姿である。

註

(1) また、「生死」を「迷い」とか「生き死にの迷い」のように用いるとき、「迷いの存在」と「人の心の迷い」のいずれ

にも言及されることから、意味にあいまいさを生じると考え極力避けた。

- (2) 『浄土真宗聖典(註釈版第二版)』本願寺出版 二〇〇四(以下、註釈版と略す) 八一―一二頁
- (3) 註釈版 五九六頁
- (4) 註釈版 一六六頁
- (5) 註釈版 一四七頁
- (6) 註釈版 一九二頁
- (7) 註釈版 二〇六頁
- (8) 註釈版 五八四頁
- (9) これを己証(こしょう)というが、他には、他力廻向、名号を行とすること、信心正因、悪人正機などが挙げられる。
- (10) 註釈版 二六四頁
- (11) 註釈版 一七頁
- (12) この場合「人天」と言うように、六道を転生するもの全てを意味し、天人等も含まれる。
- (13) 本願信受を現生において正定聚の身になることとした。すなわち、いまこの生死の中にあって、往生する身と定まること、そして命終のとき必ず浄土往生すること、さらに往生すれば直ちに成仏することとした。本願信受⇨現生正定聚⇨浄土往生⇨成仏⇨涅槃が、親鸞の構想である。ただし、後述するが、現生正定聚と浄土往生は、等同一いわれるが、ほぼ等しいのである。「往生した身」でなく、「往生すべき身」なのであるから。
- (14) 註釈版 五八一頁。なお、後半部は「すなわち大悲をおこすなり これを廻向となづけたり」と還相廻向のことなので引用から省いた。
- (15) 註八参照。
- (16) 「此土成仏」の考えである。
- (17) 「彼土成仏あるいは彼土得証」の考えである。
- (18) 註釈版 三〇七頁
- (19) 註釈版 五六七頁

- (20) 『真宗聖教全書』（以下、真聖全と略す）二の六〇五
- (21) 真聖全 二の六〇六
- (22) 註釈版 二〇三頁
- (23) 早島鏡正 『正信偈を読む 教行信証入門』 日本放送出版協会 一九九八 七三頁
- (24) 村上速水 『正信念仏偈講述』 永田文昌堂 年号不詳 八七―八八頁参照
- (25) 註釈版 六九三頁
- (26) 註釈版 八三六―三七頁
- (27) 註釈版 八三六頁
- (28) 『尊号真像銘文』 註釈版 六五二頁
- (29) 『一念多念文意』 註釈版 六九〇頁
- (30) 註釈版 五七三頁
- (31) 註釈版 六〇五頁
- (32) 『親鸞聖人ご消息』 六 註釈版 七四八頁
- (33) 『親鸞聖人ご消息』 二〇 註釈版 七七八頁
- (34) 真聖全 一の六五二
- (35) 真聖全 二の四六〇
- (36) 註釈版 一三二頁
- (37) 註釈版 四八六頁
- (38) 註釈版 五七四頁
- (39) 前述の「捨機」を想起されたい。
- (40) 楠恭 『NHKころをよむ 信心の華』 妙好人を語る（下）（日本放送出版協会 一九九八 一四七頁）これは竹部勝之進の「天下泰平」と題する句で、原文はカナ文である。また「生きてよし、死してよし」は、『大河内了悟集 生きてよし、死してよし』（昭和仏教全集 3 教育新潮社 一九六五 二四九頁）に「法味寸言」として見られる。「紅

榎英顕教授の御教示に深謝します」

生死を超える（日野紹運）

